

個人道徳の発達に関する研究 (9)

— 文化的信念としての性役割観と母性愛意識との関連 —

○崔 順子(大真大学児童学科)・首藤 敏元(埼玉大学教育学部)・二宮 克美(愛知学院大学情報社会政策学部)
金 順子[#](大真大学児童学科)・藺 桂瑞[#](首都師範大学心理相談センター)

【問題および目的】 個人道徳場面での判断と意思決定は文化的な文脈の中で発達する。社会的地位や役割を重視する文化のもとでは、上下関係や役割に付随する義務と責任の感覚が発達するだろう。その感覚は文化的信念として個人道徳の発達に影響すると考えられる。夫婦関係における自己決定意識を検討した首藤・二宮(2001;日心)の研究を踏まえ、本報告(9)では文化的信念としての男女の役割観と母性愛意識に焦点を当てる。そして、日本、韓国、中国の大学生を対象に、性役割観と母性愛意識との関連を検討し、それらと家族関係における自己犠牲の義務感と自己決定意識との関連を探る。

【方法】 <被調査者> 646名の大学生が調査に協力した(日本の大学生 234名、中国の大学生 195名、韓国の大学生 217名)。<調査時期> 2001年9月から11月。<調査項目> ①**母性愛意識** 大日向(2000)を参考に、「子どもを産む性として、女性が子育てに専念するのは当然である」「子どもが三歳頃までは、母親は仕事を持たずに子育てに専念した方がよい。」など18項目を作成した。回答は5件法。②**性役割観** 「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てた方がよい。」「夫の健康管理は妻の役目だ。」など14項目を作成した(5件法)。③**自己犠牲の義務と自己決定意識** 家族の要求と自分の要求が葛藤する場面を7つ作成し、それぞれについて自己犠牲の義務と自己優先を含めた自己決定権意識を質問した。

【結果および考察】 ①**母性愛意識** 項目分析の結果、15項目を因子分析にかけた。全データと3カ国の男女別に主因子法による因子分析(共通性は重相関係数の二乗)を行った結果、日本の男性を除いて、2因子から成るほぼ同一の因子構造が認められた。第1因子は「何人たりとも、子どもへの愛情の深さは生みの母親にはかなわない。」などの7項目への負荷量が高く、「愛する母性観」と命名された。第2因子は「夫の収入で十分やっつけられるにもかかわらず、子どもを預けて働きにでる女性は

母性が欠けている。」などの8項目への負荷が高く、「育てる母性観」と命名された。日本の男性では、「育てる母性観」の因子が、子どもを預けて働きに出る母親への非難と子どもへの悪影響(三歳児神話に相当)の因子に分かれていた。本報告では2因子として尺度化した(3カ国の男女別にみた α 係数は.62~.82)。各得点に関して、3(国)×2(性)の分散分析を行った。いずれも国と性の主効果が有意になった。性差については、愛する母性観では女>男、育てる母性観では男>女であった。国の主効果について多重比較した結果、愛する母性観では韓国>中国≒日本、育てる母性観では韓国≒日本>中国となった。②**性役割観** 3カ国の男女とも一因子構造であった。 α 係数は.63~.79。3×2の分散分析の結果、性と国の主効果が有意であった。多重比較の結果、男>女、中国>日本≒韓国が認められた。③**母性愛意識と性役割観との相関** 愛する母性観と育てる母性観は、性役割観と有意に相関していた。愛する母性観よりも、育てる母性観の方が性役割観と有意に強く相関していた(中国の男性を除く)。

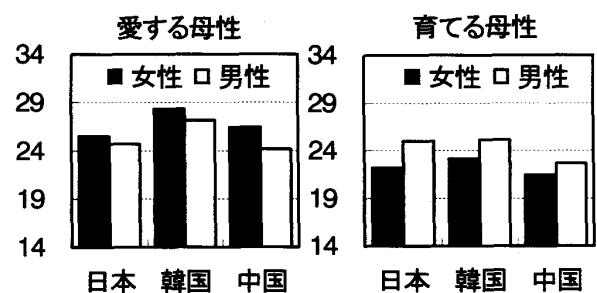


図1. 母性愛意識の平均値

④**母性愛意識、性役割観と自己犠牲—自己決定との相関** 日本、韓国、中国の女性において、2つの母性愛意識と自己犠牲の義務感とがプラスに有意に相関していた。さらに日本の女性の自己決定意識は、性役割観および育てる母性観とマイナスに有意に相関していた。日本の女性は伝統的な役割観、母性観を否定することで、家族の中での自己決定を達成しようとしていることが示唆される。
<付記:科研費・基盤研究(B)(2)12571008の補助を受けた>